



ジョージア(グルジア)便り その74

ジョージアに流れる川

文 高野 陽年

text by Yonen Takano



ロシアの友人がやたらと勧めてくるので、19世紀の文豪レーモントフを実家の書庫から引っ張り出してきた。レーモントフはロシアではプーシキンにも勝るとも劣らない国民的人気を未だに誇っている。久々のロシア文学に緊張しながら1ページ目を開くと

「アラクヴァとクラの流れが姉といもうとのようにだき合いながら、瀬おとも高くおちあうあたりにひとつの修道院があった」とある。

僕は何カ月も目にしていない懐かしい風景、そしてレーモントフが書いたところから変わらないう風景がすぐさま頭に浮かんできた。この風景はトビリシ郊外の川沿いの小高い丘から望む景色なのだ。二つの支流が連なる丘の前で一つに交わり、丘の向こうには草原が永遠と広がる。ジョージアの美しい風景を描いた本は僕が生まれる前からずっと書庫で発見されるのを待っていた。そして僕はそのことを知らずに実際現地に行つて感動したわけだから、なんだか旅先で出会った異国の友人と偶然地元で再開したような不思議な気持ちになった。

レーモントフは頻繁にジョージアを訪れていたもので、ジョージアが舞台の作品が多々ある。反ロシア感情の高いジョージア人とは相反するように、この文豪に慣れ親しんできたロシア人にとつてジョージアは憧れの土地、彼らを魅了してやまない場所なのである。一方的な片思いであるとも言える。両国の政治的摩擦から直行便が飛ばなくなつてからもロシア人はわざわざほかの都市を経由してまでジョージアを指していたのだ。

「いもうと」分であるクラ川は首都トビリシを二分するように流れている。古代人がこの川辺に街を建てたのだから。流れが速いせいなのか、生活排水が流れ込んでいるせいなのか、水面はいつも茶色く濁っている。橋の上から釣竿を垂らす男たちの狙いは髭を生やした大きな鯉だ。川べりには大した堤防もなく、すぐに幹線道路が走つて、日本の中古車が排ガスを巻き上げながら猛スピードで疾走している。悠久の時をかけてクラ川が削り取った崖の縁には奇抜な高層マンションが建つていて、いつも見る度に崩れ落ちないか心配になる。マンションの土台はむき出

しのバームクーヘンのような地層で、もしかすると化石なんかも挟まっているのだろう。

江戸川沿いで育つた自分にはクラ川はなんだかパツとしない川に見える。電車で大きな河川を越えるときのようなワクワク感も感じない。これでは「寅さん」が黄昏れたところで絵にはならない。しかし不思議なものでトビリシ市街を抜けるとクラ川もぐつと大河の様相になり、まるで川自身が生きているかのような魅力が備わるのだ。

レーモントフもそんなクラ川に魅了された一人なのであろう。

Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。現在はその団の主要なダンサーとして国内外の公演で劇場を牽引している。立教大学中退。